

むかし、あるところに、男とおかみさんが住んでいました。ふたりには、男の子がひとりありました。この子は、親のいうことを、なんでも聞きました。

あるとき、お父さんとお母さんは、ふたりでこんな話をしていました。

「あの子は、わたしらのことを何でも聞いくいい子だ。でも、一厘銭いちりんせん三枚で大船おおぶね一艘そうぶんもうけておいでといったら、それには『できない』っていうだろうねえ」

そこへ、外で遊んでいた男の子が、帰ってきました。お父さんは、

「なあ、おまえ。一厘銭三枚で、大船一艘のもうけをしてこないか」といって、三厘さし出しました。男の子は、

「はーい」といって、お金を受けとると、さっさと出て行きました。お父さんとお母さんは、

「あれまあ」といってあきれました。

男の子は、足にまかせて歩いて行きました。すると、ある店先みせさきに、土で作ったおきあがりこぼしが置いてありました。男の子は、

「このおきあがりこぼしは、いくらですか」とききました。店の人が、

「ふたつで三厘だよ」といったので、男の子は、

「じゃあ、ふたつください」といって、おきあがりこぼしを買いました。

男の子は、それを両方のたもとに入れて歩いて行きました。すると、景色のいい所にやって来ました。すわってひと休みしていると、右のたもとと左のたもとのおきあがりこぼしが、

「ここは、いい景色だなあ。ひとつ、相撲すもうでもとろうか」といって、飛び出して来ました。そして、

「はつけよい、のこった」といいながら、取ったり投げたりして相撲をとり始めました。男の子は、おもしろがつて見ていました。

やがて、男の子は、おきあがりこぼしに、

「なあ、おまえたち、隣村となりむらに行っても相撲をとるか」とききました。おきあがりこぼしは、

「とる、とる」といいました。

男の子は、隣村しょうやの庄屋の家に行きました。そして、

「庄屋さま。あした、おきあがりこぼしが相撲をとります。みんなに見物に来るように知らせてください」とたのみました。庄屋は、おもしろがつて、すぐに、

「あした、おきあがりこぼしが相撲をとるから、見物料十銭持つて見に来るように」とおふれを出しました。そして、砂浜どひように土俵を作りました。

夜が明けると、土俵のまわりにたくさんの人が集まって来ました。

男の子は、土俵の東と西におきあがりこぼしを置きました。おきあがりこぼしは、

「はつけよい、のこった」と、相撲をとり始めました。そのおもしろいこと。

「十銭じゃ安すぎる」といって、お金を土俵に投げける者、反物たんものやなんかやを投げける者、大さわぎになりました。

庄屋も、たくさんのほうびをくれました。

相撲がすんで、もらった物をみんな大船に積んだら、ちょうど船一杯になりました。男の子は、旗に「三厘で大船一艘のもうけ」と書いて船に立て、船乗りをやとつて、村の浜に帰りました。浜に出ていた村人たちがびつくりして、男の子の親に知らせました。お父さんとお母さんは、

「本当かい、本当かい」といいながら、走って来てみると、荷物をいっぱい積んだ大船の上に男の子が立っていました。

それからは、親子三人、安楽に暮らしたということです。

村上郁再話

資料『昔話研究第2巻第九号』民間伝承の会